

# 大バカ野郎たちの出発

『へばの』プロダクションノートにかえて

桑原広考

今から2年と少し前の秋口、私の元にある一通のメールが届いた。そのメールには「企画書」と題されたファイルが添付されていたのだが、どうやら容量が大きかったためか、初め開くことが出来なかった。すぐに再送の旨を伝え、送り返されてきたファイルを開いた私は改めて驚愕することになった。

自立を描きたい。今、ここにあっての。

という一文から書き始められた「企画書」は、実に原稿用紙にして150枚を超えるもので、印刷すると優に3センチはあろうかという程の厚みを持つていた。印刷した紙の束を捲っていくと、そこには企画意図、参考資料、シノプシス、そして最後に私へ宛てた手紙が記されており、一思いに読み切ったところで、私の頭の中にある言葉が過った……「狂っている」。そうでなければ、余程の大バカ野郎の世迷い言としか思えない。どうかしている。

差出人の名前は、木村文洋。それより1年半くらい前の春に、井土紀州監督の『ラザロ・LAZARUS』『朝日のある家』篇で現場を共にし、それから数回顔を合わせたことのある男であった。確かに変えがたい出会いと共同作業をしたであろうし、何やら京都で映画製作をしているということも聞いていたが、こういう映画が作り

たいかなどと膝を突き合わせて話したこともなく、その頃はどのような人間か全く知る由もなかった。そうした中で、突然届いた「企画書」だった。

真樹と大和とは、車で六ヶ所村へと戻った。村はもう深夜になっていた。六ヶ所村では巨大な風車がぐるぐるんぐるん、回っていた。夜になつていて回る風車は不気味だった。海の音が聞こえた。

大和「気味が悪いな。俺はここ、嫌いだ。」

大和はそう言った。真樹は答えた。

真樹「……どうして？」

大和「いろんなものがゆがんでいる。」

真樹「……僕には、東京の方がそう見えた。」

大和「……そうか？俺は好きだ、東京。ゆがんでいるのもひっくり返りてかもしれない。」

真樹「東京タワーも？」

大和「好きになつてきたのは最近だけだな。あれ（風車）に比べたら、可愛い。愛しい。枯れる直前の向日葵みたいに見える。」

真樹「あれ、怪物じゃないですよ。」

風車が何台も回っていた。

真樹「あれは、ただの風力発電ですよ。敵じゃないんです。」

大和は敵？と疑うように笑った。

紀美に、村の男・タケルが、ぶざけるように後ろから覆い被さった。タケル「なんでお前が血採られてるんだ？お前ら、その血、何に使うんだ！」

タケルは凄力で大和を突き飛ばした。大和はすでに抵抗できなくなつており、そのまま突き飛ばされた。

タケル「そんなのみんな知ってるだろ？俺はね、あそこで14年働いているの。死ぬ奴は死ぬ、生きる奴は生きるんだよ。あれつくった連中が一番そう言っているだろ。汚染じゃないね、運命だね。科学や文明が進歩したら、死ぬ人間が増えるのは当然だろ。俺らにはどうもできないし、お前ら都会人はそういう文明の恩恵で生きている。そういうもんだろ？わかったら、つまらないこと、やめろ！」

タケルは、注射を蚊を払うように追い払うと、紀美の腕の血をすすった。紀美はされるがままでいた。

注射器は割れて、紀美の血が床に広がった。

夜中に真樹は目覚めた。全身を縄で縛られ、倉庫に監禁されている。夜中でも、ヘリの音が容赦なくバラバラと聞こえた。

「まだ避難していない方。電灯をつけて下さい。家に電灯をつけて下さい。窓を開けてはいけません。冷房をつけてもいけません。窓を決して開けてはいけません。家に出てはいけません。避難を求める方は、電灯を、点滅させて下さい。付けたり、消したり、を繰り返して



ください。」

ヘリからの機械的な、遠い放送の音が聞こえる。真樹はボロボロになった顔を立ち上げた。月光に明るみが出る、雑多な陰毛を見つめる。

「あああああ！」紀美の叫び声が聞こえた。真樹は監視されていた部屋を転がっていった。そこは2階の納屋だった。真樹は、よろよろと声がする方向へ歩いていった。

ヘリの轟音が鳴る中、真樹、紀美、タケルの3人は森を歩いた。森を登っていった。3人とも体力が限界に来ていた。

真樹は途中で倒れた。倒れながら、光景が揺らぐのを見た。

真樹「違う……」

真樹は空をあおきながら、つぶやいた。

「こんなのは違う……」

倒れながら、先に歩く、タケルと紀美とを見つめた。紀美は振り返ったが、タケルが腕をひっぱって連れて行った。真樹はよろよろと歩きながら、一つつぶやいた。

「……違う。」

真樹は大木にすがって、血を吐いた。ただ酩酊する光景にじっと視線を注ぎながら、ただ歩いた。ツタに飲まれたトラック、使われなくなった田、海、すべての無人の光景が揺らいだ。

銃声が鳴った。真樹は大木にすがって、その方向を眺めた。タケルが倒れている。紀美がそこに座り込んでいる。ガスマスクに青い防災コートのものらしい自衛官が2、3名、彼らを包囲していた。

「テロリストです。」

自衛官は、シーバーでそう伝えた。タケルの全身を探った。

自衛官「戻ってきましたね、はい、ヤマトタケルです。青森県六ヶ所村再処理工場勤務のヤマトタケル。放射能反応が特に強烈であった大山に戻ってきました。この山にブルトニウムを埋没しつづけたんです。いえ、今回の汚染とは直接の関連は無いでしょう、ですが、関連付けることは可能です。」

自衛官が振り向いた瞬間、真樹が突進してきた。真樹はナイフで一人の自衛官にさしかかり、押し倒した。背後に回った自衛官が、真樹に銃を放った。真樹は構わずに、自衛官に刃を振り下ろした。自衛官は絶命した。

真樹「返せ！返せ！俺に返せ！返せーッ！」

真樹は訳も分からず叫んだ。

この断片を取り出してもあまりに散漫な物語を自主映画で製作し、おまけに青森県の六ヶ所村と山口県の祝島、そして東京を跨いで撮影しようと言うのである。書き連ねられた文章を何度読み返しても、どうかしているとは思えない。そのうえ、私が製作を引き受けるのならば、すぐにでも東京に出て来るとまで言っている。あまりに無謀な企画と言動に、「こいつは、本当にこれを自主映画の規模で撮影できるとでも思っているのか？」そんな疑念さえ浮かぶほどであった。

それを裏付けるように、彼はそれまで活動していた京都の映画仲間たちに同じような企画書を送り続け、言っまでもなく、「こいつはこいつ」断られていたようである。言っつなれば、総スカンを食らったのである。面白い。

しかしながら、私はそう思った。それでもなお食らいついて、薬をも掴む思いで、何の保証も先行きもない私のような人間に企画を投げつけてでも、映画を作りたいたいと思っている。その意志だけは、企画書の「厚み」と共に伝わってきた。私はこの大バカ野郎に一枚乗ってやろうと思ひ、すぐさま返事を送った。「もうすでに映画製作は始まっている」と。この時点で、私も狂っていたか、もしくはどうかしていたのだらうと思う。

それから2年あまり、シナリオ作成から撮影、編集の後、追加撮影までに至る製作過程と上映を実現するまでの宣伝活動を木村文洋と数少ないスタッフたちと共にやってきた。そのひとつひとつで衝突し合い、エピソードには事欠かないのだが、ここではそれを語ることを控えようと思う。なぜなら、『へばの』をご覧いただければ、その一端が垣間見えるだろうし、それらが灰汁のように滲み出ている作品になっているであろうから。

ただ、ひとつだけ言えることがある。2009年1月31日の公開をもって、『へばの』が一人前の映画として世に問われようとしている今、木村文洋という人間は、本物の大バカ野郎だったということである。そして、その片棒を担いだ私も、それに引き続いてくれたスタッフたちも同様に。恐らく、このような出来事は、そうたぐさんあることではないのではないかと思う。だからこそ言える。『へばの』は、まさに大バカ野郎たちの出発点だろうと。

そして最後にスタッフ・キャストを代表して、この出発を見守ってくれた、見届けてくれた、家族、友人、愛する人、その他あらゆる全ての皆様に感謝と敬意を伝えます。ありがとうございました。



桑原 広考（くわはら・ひろたか）／プロデューサー

1978年埼玉県生まれ。2004年、日本大学文理学部在学中に井土紀州監督『ラザロL'AZARITE』の複製の廃墟「篇」の制作に参加。その後、井土紀州を中心とする映像製作集団、スピリチュアル・ムービーズに加入。本作品で初めてプロデューサーを務め、企画・製作から配給・宣伝に至るすべてのプロセスを指揮する。